戸田城外著『推理式指導読方』解析

川　島　　清

概　　要

本論では、昭和13年（1938年）、日本小學館より改版発行された戸田城外著『推理式指導読方』巻十一六年前期用の研究をおこなう。

本書は、教科書準拠版の小学６年生向け国語参考書である。にもかかわらず、その〈項目秩序の体系性〉、〈解説の徹底した合理的明快さ〉、〈本文と項目相互の関連性〉は大学受験参考書以上に秀逸していて、他に類を見ない。ゆえに「わかりづらい」「使い物にならない」等の国語参考書の壁を見事に打ち破っている。そのうえ本書は、単に〈わかりやすさ〉のみを優先させるにとどまらず、国語に科学的な〈文章観〉を導入している。これが、旧弊な教育の横行していた昭和初期に著された、ということ自体、一つの驚異といってよい。

そこで、ここに本書28課中の初課である「吉野山」の解説に秘められた〈解説の合理的明快さ〉と〈本文と項目相互の関連性〉について論じてみたい。

〈　序　〉

昭和13年(1938年)、日本小學館より戸田城外著『推理式指導読方』巻十一六年前期が改版発行された。本書は教科書準拠版の国語学習参考書（小学６年対象）で、他には類を見ない〈本文と項目間の相関性〉と〈解説の合理性〉を備えていた。それを裏付けるかのように、山田高正との共著『推理式読方指導』からかぞえて昭和４年４月までに「改版二十四版」を重ね、当時のベストセラーとなった。

本論では、この書の骨格ともなる上記二テーマを解析する。全28課中、初課にあたる「吉野山」解説を題材とし、〈文段研究〉・〈語法〉・〈形式探求〉・〈参考文〉の項目が、いかに巧みに本文との相互秩序を保ち、明晰な合理性を有しているか論じたい。

以下に『推理式指導読方』の全課名と全項目名を記す。

〔全課名〕

１、吉野山　２、見渡せば　３、京都　４、源氏物語　５、法隆寺　６、五月の太陽　７、姉　８、電話の発明　９、瀬戸内海　10、日本海々戦　11、皇国の姿　12、古事記の話　13、松坂の一夜　14、北海道　15、我は海の子　16、間宮林蔵　17、樺太の旅　18、雲のさまざま　19、燕岳に登る　20、虫の声　21、十和田紀行　22、欧州航路　23、月光の曲　24、月の世界　25、秋　26、鉄眼の一切経　27、空中戦　28、日本刀

〔全項目名〕

新出漢字、読替漢字、単語の解釈、文章の解釈、文段の研究、語法、形式探求（類語・反対語）、鑑賞、挿絵の研究、参考文、内容推理問題、記憶問題、国文法。

１．『推理式指導読方』相関図

本論においては、第一課「吉野山」について本文と『指導読方』に記された各項との相関関係を述べてみたい。（他の課との相関関係については、

後の研究で詳らかに説明したいと思う。）

注：尚、各段の大枠の中心内容を「テーマ」または「核となるテーマ」と記し、それらの中心をなすテーマを「中心テーマ」、さらには中心テーマの核をなす内容を「主題」とした。

2．「吉野山」のテーマ

（P.26〔吉野山のテーマ図式〕参照）

資料D・D１と〔吉野山のテーマ図式〕の内容を照合のこと。

3．「吉野山」の構造

まず、D１本文全体に記された「桜の眺望」（囲みなし無印）、「歴史的眺望」（▒囲み）、「歴史事項」（□囲み）のマークを見てみたい。

これを見ると、以上三種類のテーマの記載分布が明確にわかる。と同時に各テーマの推移と各段における中心テーマを知ることができる。

第一・第二段は「桜の眺望（囲みなし）の内容が多く、第三・第四・第五段全体で「歴史的眺望・事項」（▒囲み）と「歴史事項」（□囲み）とがほぼ等しく記載されている。特に第三・第四段は中心が「歴史事項」の内容となり、第六・第七段は「桜の眺望」と「歴史的眺望」とが混ざり、そして最後の第八段で全てが「桜の眺望」となる。

これは、現象世界（第一・第二段）➡現象と本質をつなぐ世界から本質世界（第三・第四段）➡現象と本質をつなぐ世界から本質世界から本質と現象をつなぐ世界（第五段）➡本質と現象をつなぐ世界から現象世界（第六・第七段）→現象世界（第八段）を示し、以上のテーマの推移と構造が明らかになる。（P.26「吉野山のテーマ図式」断層

〔吉野山のテーマ図式〕

本文は大別して2種類の対立したテーマによって構成される。

桜の眺望（現象・刹那性）⇔ 歴史性（現象の奥に隠れた精神性・永遠性）

が柱となっている。桜の眺望と歴史性は対立する。細分化すると「歴史性」は二つに分かれる。

桜の眺望 ⇔ 歴史的眺望（事項）＝ 歴史事項（歴史性）

※「歴史的眺望（事項）」は歴史性を持つため、内意としては「桜の眺望」と対立するが、本文の構造上連続する。

断層化すると

（断層図）

（現象世界）	**桜の眺望**（現象世界・刹那性）
（中間世界）	**歴史的眺望**（現象とその奥にある精神をつなぐ層・宗教）
（本質世界）	**歴史事項**（本質世界・精神・永遠性）

D1　D　吉野山（本文）

桜の眺望
歴史的眺望
歴史事項

第一段

①吉野山かすみの奥は②知らねども見ゆる限りは櫻なりけり全山花の雲に包まれたる吉野山の光景間まのあたり見るが如し。

第二段

①吉野神宮駅に下車して櫻樹多き坂道を登る。②先づ後醍醐天皇をまつれる吉野神宮に詣で、村上義光の墓をとぶらふ。③更に進めば眺望いよいよ開けて見渡す限りすべて花なり。これはこれはとばかり花の吉野山といひし古人の句我をあざむかず。ここを下の千本といふ。

第三段

①吉野の町に入れば蔵王堂あり。②堂前四本の櫻ある所は、③大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張らせ給いし跡なりとぞ。④蔵王堂の付近に、金輪王寺跡及び吉水神社あり。⑤何れも吉野時代の行宮のありし所。⑥後醍醐天皇の御製に、ここにても雲井の櫻咲きにけりただかりそめの宿と思ふに花に寝てよしや吉野のよし水のまくらのもとに石走る音

第四段

①吉水神社を出づれば、谷をへだてたる山腹に如意輪寺あり。②正平の昔、楠木正行が決死の士百四十三名の名を壁に書き連ね、かへらじとかねて思へばの和歌を書き残したるは此の寺なり。

第五段

①寺の上の小高き所に、後醍醐天皇のみささぎあり。②天皇行宮にましますこと三年、遂に北の天を望み崩御ありし御心事を③察し奉れば、涙そぞろに禁じ難し。昭憲皇太后ご参拝の折の御歌、よし野山みささぎ近くなりぬらむ折り来る花もうちしめりたる

第六段

①此の付近、②櫻は山にも谷にも満ち満ちたり。これを中の千本といひ、なほ登れば上の千本あり。

第七段

①本道を南に進みて忠僧宗信の墓をたづね、更に坂道をたどれば、吉野水分神社を経て金峯神社に至る。この付近②にもまた櫻多し。これを奥の千本といふ。

第八段

①下・中・上・奥の千本の外、吉野山は至る所櫻樹ならざるなし。花は蕾より咲きそめて次第に山上に及ぶ。其の間はほとんど一月にわたるといふ。吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ

D2「文段研究」

第一段　I全山櫻の花に包まれた吉野山の光景をよんだ和歌と感じ。

第二段　I吉野神宮駅IIからIII下の千本までの眺望。

第三段　I蔵王堂と、IIその付近にある金輪王寺と吉水神社とについてIII後醍醐天皇の御製を偲びまつること。

~~第四段~~　I楠木正行とII如意輪寺について。

~~第五段~~　I後醍醐天皇御陵にII天皇の御心事をIII察し奉ること。

~~第六段~~　I中の千本の櫻のさまとII古跡。

第七段　I奥の千本とそれに行くまでのII古跡。

第八段　I吉野山は至る所櫻ならざるなく、花の一月にもわたって咲き及ぶさまは、古人の和歌にも偲ばれること。

D3「語法」

（中心テーマ）詩的イメージの眺望

（中心テーマ）実際に見た眺望

（副テーマ）~~歴史的眺望~~ ＋ （中心テーマ）歴史事項

（副テーマ）~~櫻の眺望~~ ＋ （中心テーマ）歴史的眺望

櫻の眺望

「限り」

「更に」「いよいよ」「開けて」「花」

「落ち」「何れ」「雲井」

「たづね」

「わたる」

図参照。「歴史的眺望」は現象世界と本質世界をつなぐ層である。)

つまり、第一段で現象世界の桜に焦点をあて、第二段で現象世界から中間世界へ潜り、第三・第四段で中間世界から本質の世界へ至る。そして第五段によって第三・第四段の（中間→本質）の流れをうけ、一転して逆に「本質世界」(歴史性・精神性)を離れ中間世界に浮上しはじめる。その後、第六・第七段で中間世界から現象世界へ移り、最後に桜が満開の現象世界へ帰る。

このことから各段の主たるテーマは以下の通りとなる。

第一段＝「桜の眺望（現象世界)」
第二段＝「桜の眺望（現象世界)」から「歴史的眺望（中間世界)」
第三・第四段＝「歴史的眺望（中間世界)」から「歴史性（本質世界)」
第五段＝「歴史的眺望（中間世界)」から「歴史性（本質世界)」へ、「歴史性（本質世界)」から「歴史的眺望・事項（中間世界)」へ
第六・第七段＝「歴史的眺望（中間世界)」から「桜の眺望（現象世界)」へ
第八段・「桜の眺望（現象世界)」

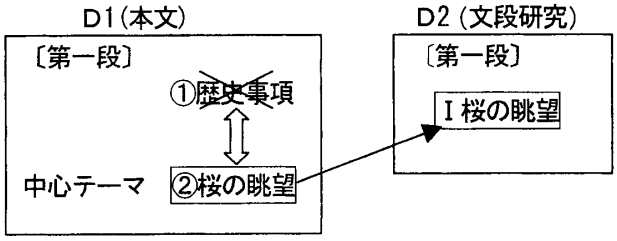
以上の構造で着目したいのは「歴史的眺望」である。これは現象世界と本質世界の過渡になる部分で、いわば二者のつなぎの働きをする。よって中心テーマとなる以外にも「桜の眺望」と「歴史事項」との結接層としての役割を持ち、各段において不可欠のテーマとなる。これを「構造上のテーマ」とする。又下の千本から奥の千本への道程を記す「桜の眺望」は、「構成上のテーマ」とする。

4．本文と文段研究との対応

【資料D「D１・D２の対応」参照のこと。①②…（**本文内に記されている記号を示す**）は、I II…（**文段研究内に記されている記号を示す**）に対応。】

第一段

D１本文〔第一段〕は、①「歴史事項」と②「桜の眺望」、以上二者の対立内容によって構成されている。中心のテーマは②「桜の眺望」。よって文段研究（D２第一段I）は、中心テーマと対立する①歴史事項を省いて、②「桜の眺望」内容のみが記載されている。　本文②＝文段研究I（歴史事項＝記載１、桜の眺望＝記載１）



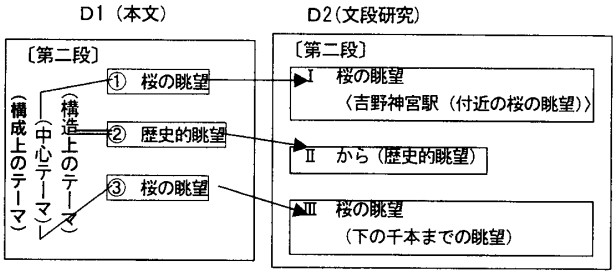
第二段

D１本文〔第二段〕は、①「桜の眺望」、②「歴史的眺望」、③「桜の眺望」以上三者によって構成される(桜の眺望＝記載２、歴史的眺望＝記載１)。テーマとして①・③と②は対立する。中心のテーマは①・③と考えられるから、文段研究において②は削除されるべきである。が、〈「吉野山」の構造〉(P.28) でも述べたように、②は「桜の眺望」と「歴史事項」をつなぐ働きをするため、本文の構造上、欠かすことはできない。よって内容上の中心テーマは①・③「桜の眺望」、構造上の中心テーマは②「歴史的眺望」となる。

文段研究においては、以上の三テーマ全てを巧みに記載している。内容上のテーマ①・③は、文段研究I「吉野神宮駅」・III「下の千本」のようにはっきりとした表記をし、構造上のテーマ②は、II「から」という表現の内に込めている。II「から」自体が経過の構造をもつ品詞なので、テーマ②と一致する。尚①③は下の千本からの道程を示す構成上のテーマとなる。(P.28「吉野山の構造」参照)

本文①＝文段研究I、本文②＝文段研究II、本文

③＝文段研究III



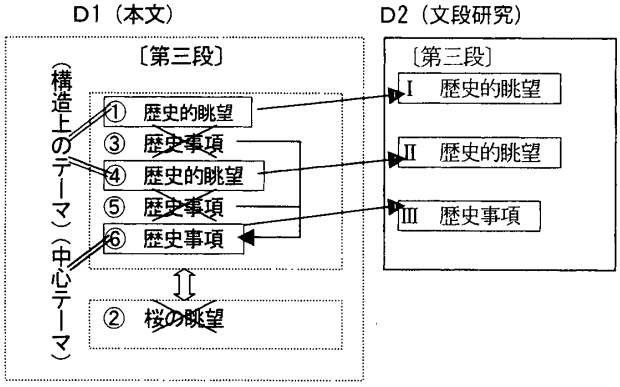
注：本文③「眺望いよいよ開けて」とあるので、「桜樹多き」と記されている本文①は、「桜の眺望」の初期状態とみて間違いない。

第三段

Ｄ１本文〔第三段〕は、①「歴史的眺望」、②「桜の眺望」、③「歴史事項」、④「歴史的眺望」、⑤「歴史事項」、⑥「歴史事項」の六者によって構成されている。第三段の主たるテーマは、①・④「歴史的眺望」と③・⑤・⑥「歴史事項」。よって文段研究ではこれらのなかの中心テーマ「歴史事項」と対立する②「桜の眺望」は省略される。ただし、この段は他の段と比べ記載量が多く、これを合理的にまとめるには、テーマに反する内容はもちろん、テーマ自身からもやむなく割愛しなければならない箇所が出てくる。そこで主たるテーマのどれを消去しているかみてみよう。

まず、①と③。①を省いて③を残したとしても意が通じないため③を割愛している。又、①を除くと「奥の千本」への過程を示せなくなる。次に④と⑤。これも上記と同様の理由で⑤が割愛されている。特に段のみならず、全体の流れを重んずる文段研究において、①・④は、以前〈「吉野山」の構造〉の章（P.28）で述べたとおり、前段とのつなぎの働きをするものもあるため、この場合省くことはできない。いわば構造上のテーマといえる。といって、③・⑤が内容的に無意味なのではなく、あくまでもやむなく行われる措置である。「かりそめの宿」という点で③・⑤は⑥の伏線的な役割を果たすと思われるので、⑥に吸収されるとみてもいいだろう。最後に⑥、これは天皇の御歌でもあり、段の「結」でもあるため残される。テーマを分析すると⑥が中心テーマ、①・④が構造上のテーマとなる。いずれにしても、なくてはならない必要不可欠な内容のみを結合させたものが、文段研究第三段Ｉ・II・IIIとなる。

本文①＝文段研究Ｉ、本文④＝文段研究II、本文⑥＝文段研究III

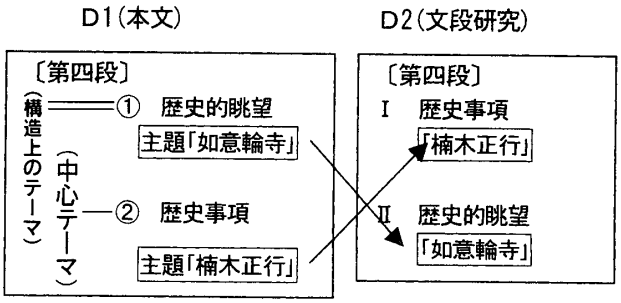


第四段

Ｄ１本文〔第四段〕は、①歴史的眺望、②歴史事項の二者によって構成される。(歴史的眺望＝記載１、歴史事項＝記載１。)中心テーマは②。二者は歴史性において共通しているうえ、①は前文からの流れを受ける構造上の働きをするため、文段研究において①・②を併記している。

文段研究Ｄ２第四段Ｉは、本文②の主題「楠木正行」をとりあげている。文段研究IIは本文①の主題「如意輪寺」がそのまま抽出されている。

本文①＝文段研究II、本文②＝文段研究Ｉ



第五段

Ｄ１本文〔第五段〕は、①「歴史的眺望」、②「歴史事項」、③「歴史に関連する事項」の三者によっ

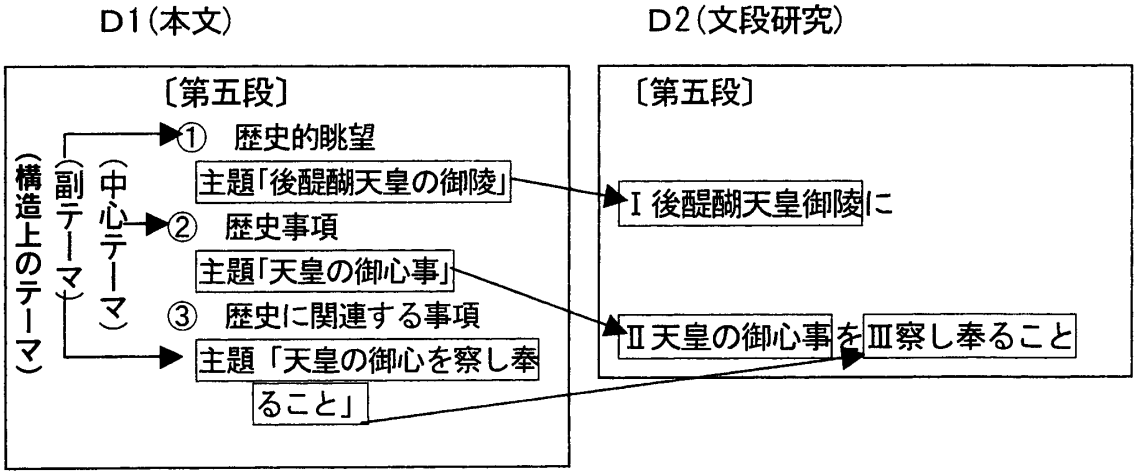
て構成される。中心テーマは②「歴史事項」。だが、①～③は歴史性という点で共通している。段の記載が第三段のように複雑・多量なわけでもなく、三者とも矛盾せず、そのうえ中心テーマ②を①・③が支えさらにこれらは、構造上のテーマともなるので、文段研究では①～③全てが併記されている。そして〈「吉野山」の構造〉の章で述べた、「中間世界から本質世界、本質世界から中間世界へ」の流れを短文で見事にまとめている。

〈①～③の主題〉
①の主題＝「後醍醐天皇御陵」
②の主題＝「天皇の御心事」
③の主題＝「天皇の御心を察し奉ること」

Ｄ２（文段研究）第五段の「まとめ文」は、本文①～③の全ての主題をとりだし、それらを巧みに構成している。

〈文段研究〉
Ⅰ　後醍醐天皇御陵に
Ⅱ　天皇の御心事を
Ⅲ　（天皇の御心を）察し奉ること

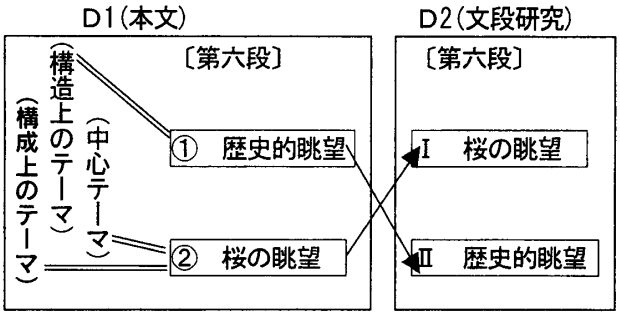
本文①～③の主題と文段研究第五段Ⅰ～Ⅲは対応する。(歴史的眺望＝記載２、歴史事項＝記載１)本文①＝文段研究Ⅰ、本文②＝文段研究Ⅱ、本文③＝文段研究Ⅲ。



第六段

Ｄ１本文〔第六段〕は①「歴史的眺望」、②「桜の眺望」の二者によって構成される(歴史的眺望＝記載１、桜の眺望＝記載１)。①の「此」は前段の後醍醐天皇陵を指し、①が「歴史的眺望」すなわち〈古跡〉であることを示す。テーマとしてこの二者は対立する。

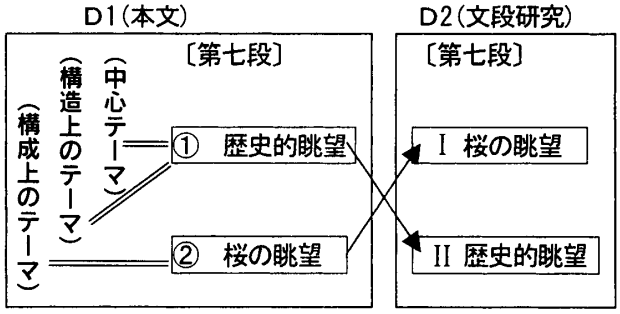
よって文段研究ではどちらか一方が削除されるべきだ。しかし、〈「吉野山」の構造〉(P.28)でも述べたように結節層としての働きをする①は、この段と他段をつなぐ不可欠な存在なので、記載は少ないが、重要なテーマとなる。又、②（現象）も第七段「奥の千本」への道程を示し、結論の第八段「桜の眺望（現象）」を導く重要なカギとなる構成上のテーマで、これも不可欠である。内容的には第八段結のテーマ「桜の眺望」の伏線的役割を担う後者が中心テーマとなる。以上のことからこの段の中心テーマは②「桜の眺望」、構造上のテーマが①「歴史的眺望」構成上のテーマは②「桜の眺望」となる。文段研究はこの二者を捉え、Ⅰ「桜の眺望」とⅡ「歴史的眺望」の内容が記載されている。本文①＝文段研究Ⅱ、本文②＝文段研究Ⅰ。



第七段

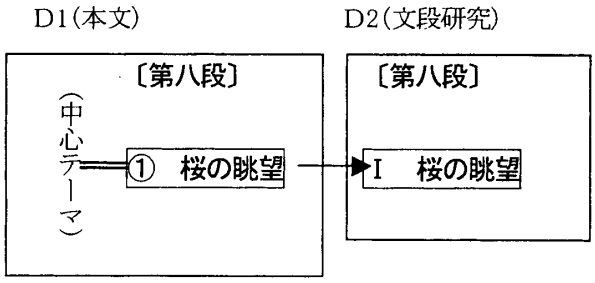
本文D１〔第七段〕は、①「歴史的眺望」、②「桜の眺望」の二者によって構成される(歴史的眺望＝記載１、桜の眺望＝記載１)。二者は対立するが、第六段と同様の根拠で、ともに重要なテーマとなる。だが①は、記載量も多く重要な事柄が記されているので、内容的に中心テーマと認識され、かつまた構造上のテーマとしての役割も果たしている。それに比べると②は、第六段②と異なって、「結」を導く構成上のテーマとしての働きしかしていない。「桜の眺望」としての内容は２語しかなく、重要なのは構成上のテーマ「奥の千本」であり、本文主テーマのひとつである〈桜の眺望〉から考えるとあまりにも貧弱である。ただし、構成のうえでは、②は重要なポイントを占める。ここでD１本文第六段と第七段の中心テーマを比較すると二者が逆転していることがわかる。直線的に「中間世界」から「現象世界」に浮上するのではなく、以上の二世界を浮き沈みしながら上昇していく状態をみてとることができるよう。これはベクトルが上方から下方に逆転し、形態は異なっているにしてもD１本文四、五段における「歴史的眺望（中間世界)」から「歴史事項（本質世界)」の重複にも類似した浮沈を確認できる。(P.29第四段本文①②とP.30第五段本文①②、「歴史的眺望（中間世界)」から「歴史事項（本質世界)」の重複。四段で①「中間世界」から②「本質世界」に沈み、さらに五段で①に浮上し又②「本質世界」に下降する）中心テーマは①、構造上のテーマが①構成上のテーマは②。

文段研究ではこの①・②をうけてⅠ・Ⅱと表記。本文①＝文段研究Ⅱ(これも第六段と同様に古跡)本文②＝文段研究Ⅰ（歴史的眺望＝記載１、桜の眺望＝記載１。)



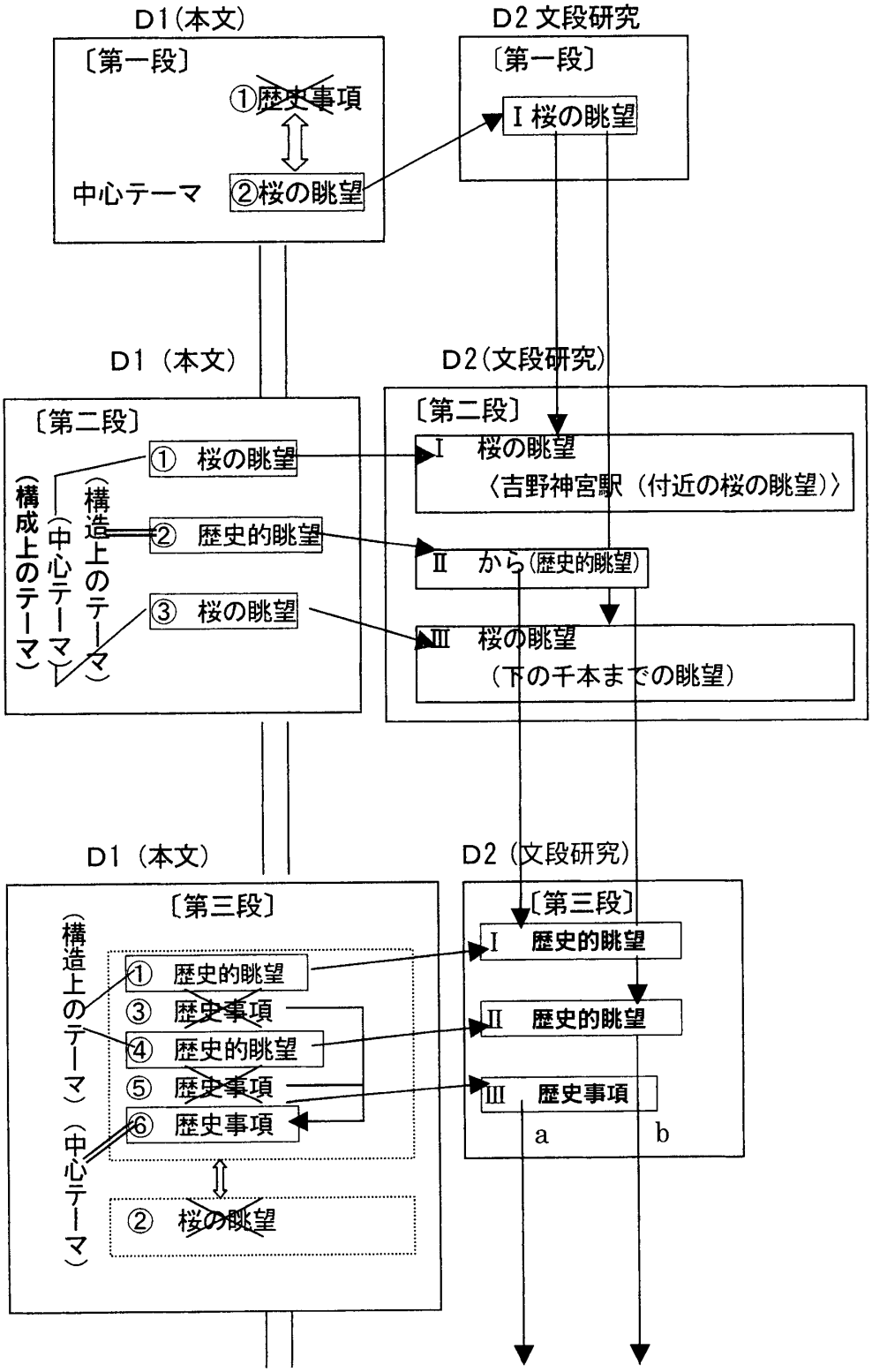
第八段

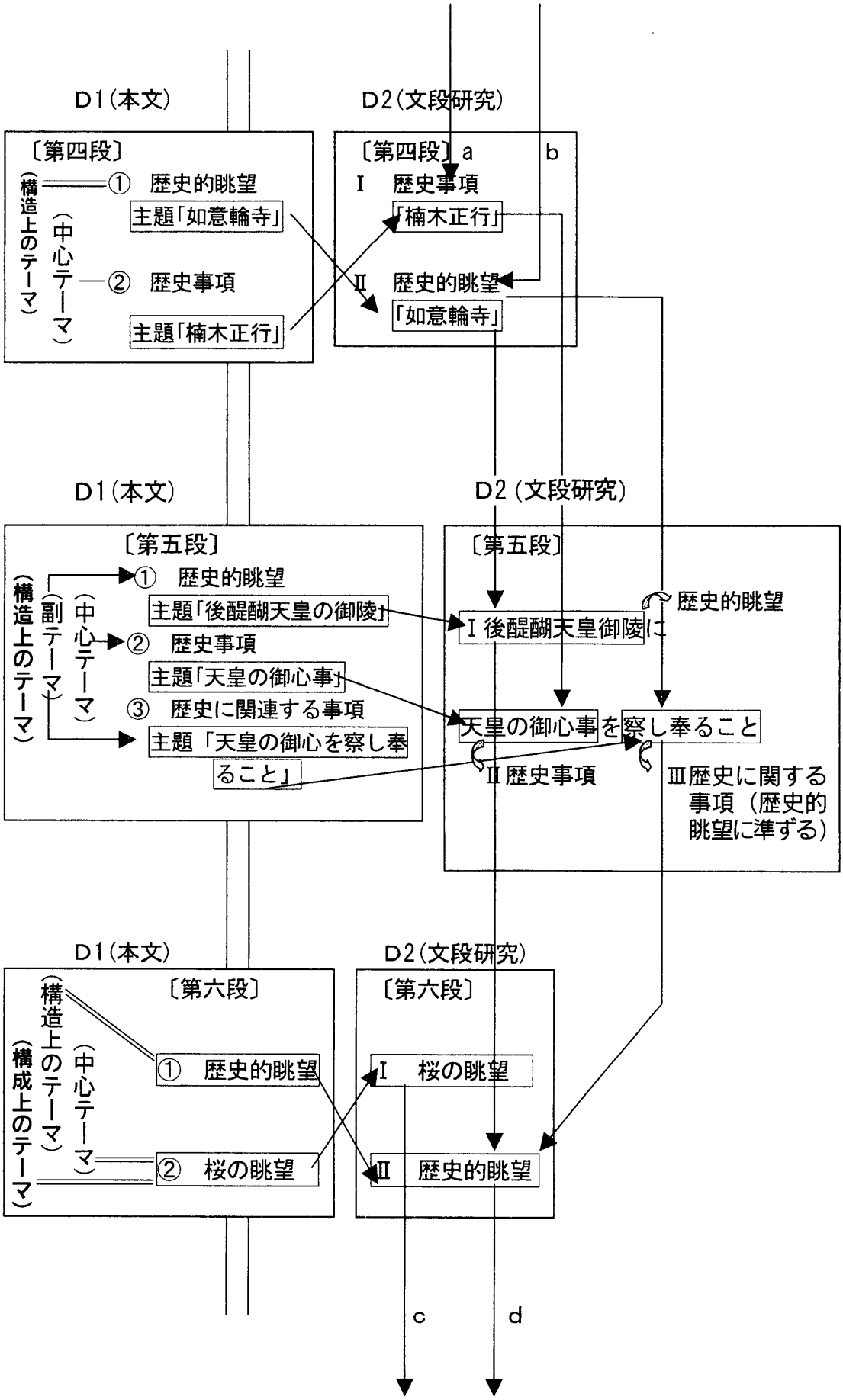
D１本文〔第八段〕は、①桜の眺望(桜の眺望＝記載１)。中心テーマは「桜の眺望」。よって文段研究もⅠ「桜の眺望」となる。
本文①＝文段研究Ⅰ

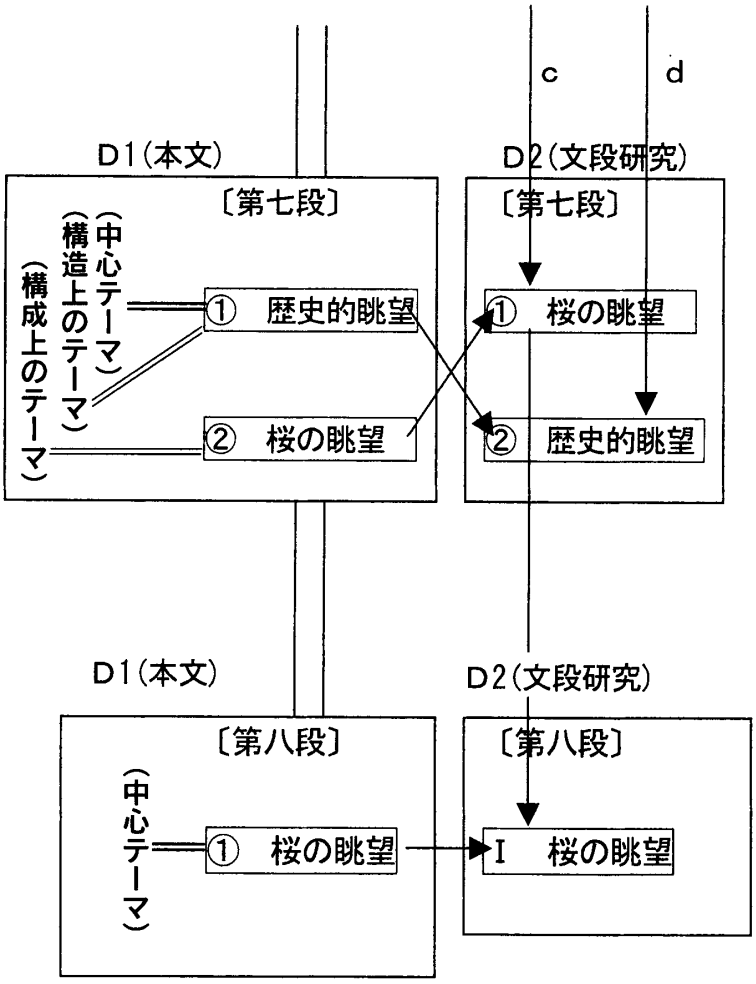


※D２〔文段研究〕で第四・六・七段のみが本文内容をクロスしまとめている。その上、全て後半が「～と歴史的眺望」の形で統一されていて、一定のリズムを持っている。第四段「楠木正行と如意輪寺（歴史的眺望)」第六段「中の千本の櫻のさまと古城（歴史的眺望)」第七段「奥の千本とそれに行くまでの古跡(歴史的眺望)」(P.33～P.34「５．相関図」とP.27D２「文段研究」第四、六、七段参照）文段研究においては他段の説明で交差表現とこの技法はみられない。実は、先述した「現象・中間・本質世界」のなかで浮沈する本文の第四、六、七段がこれらに適応している。(P.31第七段参照）これらの段のまとめをするときは決まって交差が発生する。

では、以上のような技法を用いまとめることでどのような効果があるかというと、複雑に変調する本文の段落内容に明解さと安定性がもたらされることになる。この技法を用いることで様々に浮き沈みする内容の複雑さが一掃され、簡潔に理解されやすくなる。ただし、構造上の推移に対する説明に正確さを欠く部分が生まれてくる。しかし、だからといって本文読解に多大な支障をきたすわけではない。




D1(本文)
〔第四段〕
(構造上のテーマ)
① 歴史的眺望
主題「如意輪寺」
(中心テーマ)
② 歴史事項
主題「楠木正行」
D2(文段研究)
〔第四段〕 a b
Ⅰ 歴史事項
「楠木正行」
Ⅱ 歴史的眺望
「如意輪寺」
D1(本文)
〔第五段〕
(構造上のテーマ)
(副テーマ)
(中心テーマ)
① 歴史的眺望
主題「後醍醐天皇の御陵」
② 歴史事項
主題「天皇の御心事」
③ 歴史に関連する事項
主題「天皇の御心を察し奉ること」
D2(文段研究)
〔第五段〕
Ⅰ後醍醐天皇御陵に
歴史的眺望
天皇の御心事を
察し奉ること
Ⅱ歴史事項
Ⅲ歴史に関する事項(歴史的眺望に準ずる)
D1(本文)
〔第六段〕
(構造上のテーマ)
(構成上のテーマ)
(中心テーマ)
① 歴史的眺望
② 桜の眺望
D2(文段研究)
〔第六段〕
Ⅰ 桜の眺望
Ⅱ 歴史的眺望
c
d



5．相関図

〈④本文と文段研究との対応〉で明らかにした、本文と文段研究の全体の相関図をここに示す。
※この本文でカギとなる「歴史的眺望」(時には中心テーマ、時には構造上のテーマ、時には副テーマと千変万化し本文の流れと主題を浮き彫りにする役割りをなす）が、D２文段研究の全てに記されているところにも注目してもらいたい。

〈まとめ〉

文段は各段の中心テーマと、段と段とをつなぎ、本文の流れを決定する構成・構造上のテーマが不可欠となる。その点において〔文段研究〕では、これら三者のテーマが全て記載され組み込まれている。よって本項目は、あくまでも本文の主題とその流れに照準を合わせ、これを基軸として一切ぶれることはないと結論づけることができる。そのうえ構成と構造と内容の流れが錯綜する複雑な本文から、各段のテーマを巧みに取捨選択し、実に単純で明解な「まとめ文」を形成している。確かにその単純明快さは、一見して大胆にも、又時には豪放にすら映るだろう。しかしその奥には、かくも精巧にして緻密、細心にして慎重な戸田城外の知性が輝いている。だが、この輝きは、ただ完璧な読解のみを意味するのではなく、国語という迷路に苦しみ悩む子供たちの叫びが、確実に彼の心を占めていたことを裏付ける。

6．本文・文段研究と語法の対応

文段研究は、形式段落の範疇で把握されているが、語法は意味段落のカテゴリーで考えられている。語法は、各意味段落の中枢に焦点を当てて著されている。重複する段は大胆にもバッサリ切り

落とされ、厳密に特徴点を捉え、それを表記した文中の〈語〉の語法を取り上げている。「本文の流れ」より中心テーマに重点を置いていると考えられる。

各段のテーマをここに示そう。
(「⑤相関図D２文段研究」参照)

I　第一段＝桜の眺望

II　第二段＝桜の眺望＋歴史的眺望

III　第三段＝歴史的眺望＋歴史事項
第四段＝　〃
第五段＝　〃

IV　第六段＝桜の眺望＋歴史的眺望
第七段＝　〃

V　第八段＝桜の眺望

これを共通テーマ、即ち意味段落で分けると、枠で囲ったI・II・III・IV・Vとなる。I第一段とII第二段は中心テーマが同一で、第二段の「歴史的眺望」などは記載としてほとんどないから、二者をひとつにまとめた方がいいと判断されがちである。しかし、第一段は「歌に詠まれた」眺望を表現し、第二段は「実際」の眺望を表していて、同じ眺望であっても質が異なる。よって第一段と第二段は別段と判断するほうが適切である。

さて、いま分けた意味段落の中で、テーマが重複した集合段落をみてみたい。III（第三・四・五段)、IV（第六・七段)、以上二段落。III・IVのなかで内容的にも重要で、さらに複雑で多様性があり、かつ記載量が多い段はどれか、つまり語法を摘出するのにふさわしい段はどれか。それはIIIにおいては第三段、IVにおいては第七段である。よって、IIIの第四・第五段と、IVの第六段を削除する。

次にI～Vの中心テーマを抽出し、そのテーマに適合した各段の文ナンバーを掲出する。〔「⑤相関図（P.32～34）D１中心テーマ」参照〕

I　第一段の中心テーマ「桜の眺望」
＝D１第一段②

II　第二段　中心テーマ「桜の眺望」＝D１第二段③
内容的には③がこのテーマをはっきり表記しているので①は省く。

III　第三段　中心テーマ「歴史事項」＝D１第三段③⑤⑥
「文段研究」では③・⑤は割愛されたが、項目（段落まとめ）の性質上、やむなくそうしたのであり、内容的には③・⑤も明確に「歴史事項」のテーマを表現している。

IV　第七段　中心テーマ「歴史的眺望」＝D１第七段①

V　第八段　中心テーマ「桜の眺望」＝D１第八段①

次にI～Vの中心テーマを表記した文をあげ本書の「語法」と照合する。

（　中心テーマを表す重要文　）　　（　語法　）

Ⅰ　D1 第一段②　〈　桜の眺望　〉

知らねども見ゆる限りは桜なりけり全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたりに見るが如し。

「限り」

Ⅱ　D1 第二段③　〈　桜の眺望　〉

更に進めば眺望いよいよ開けて見渡す限りすべて花なり。これはこれはとばかり花の吉野山といひし古人の句我をあざむかず。ここを下の千本といふ。

「更に」
「いよいよ」
「開けて」
「花」

Ⅲ　D1 第三段③・⑤・⑥　〈　歴史事項　〉

③大塔宮の吉野を落ちさせ給ふ時、別離の宴を張らせ給ひし跡なりとぞ。
⑤何れも吉野時代の行宮のありし所。
⑥後醍醐天皇の御製に、ここにても雲井の桜さきにけりただかりそめの宿と思ふに　花に寝てよしや吉野のよし水のまくらのもとに石走る音

「落ち」
「何れ」
「雲井」

Ⅳ　D1 第七段①　〈　歴史的眺望　〉

本堂を南に進みて忠僧宗信の墓をたづね、更に坂道をたどれば、吉野水分神社をへて金峯神社に至る。この付近

「たづね」

Ⅴ　D1 第八段①　〈　桜の眺望　〉

下・中・上・奥の千本の外、…(中略)其の間はほとんど一月にわたるといふ。吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたずねむ

「わたる」

各段落中の中心をなす文と、語法の語が全て一致。逆に言うと、本文の主要テーマ「桜の眺望」・「歴史事項」・「歴史的眺望」各々の代表的な文から語法対象の語が摘出されている。例外となるテーマはひとつとしてない。

以上、各意味段落の中の重要段落を取り上げ、その中でさらに中心テーマを表記する文を抽出し、その文の要になる語を掲出して、その語法を文例をもって記している。

重要段落 ⇨ 中心テーマ ⇨ 中心文 ⇨ 中心語 ⇨ 語法 ⇨ 文例

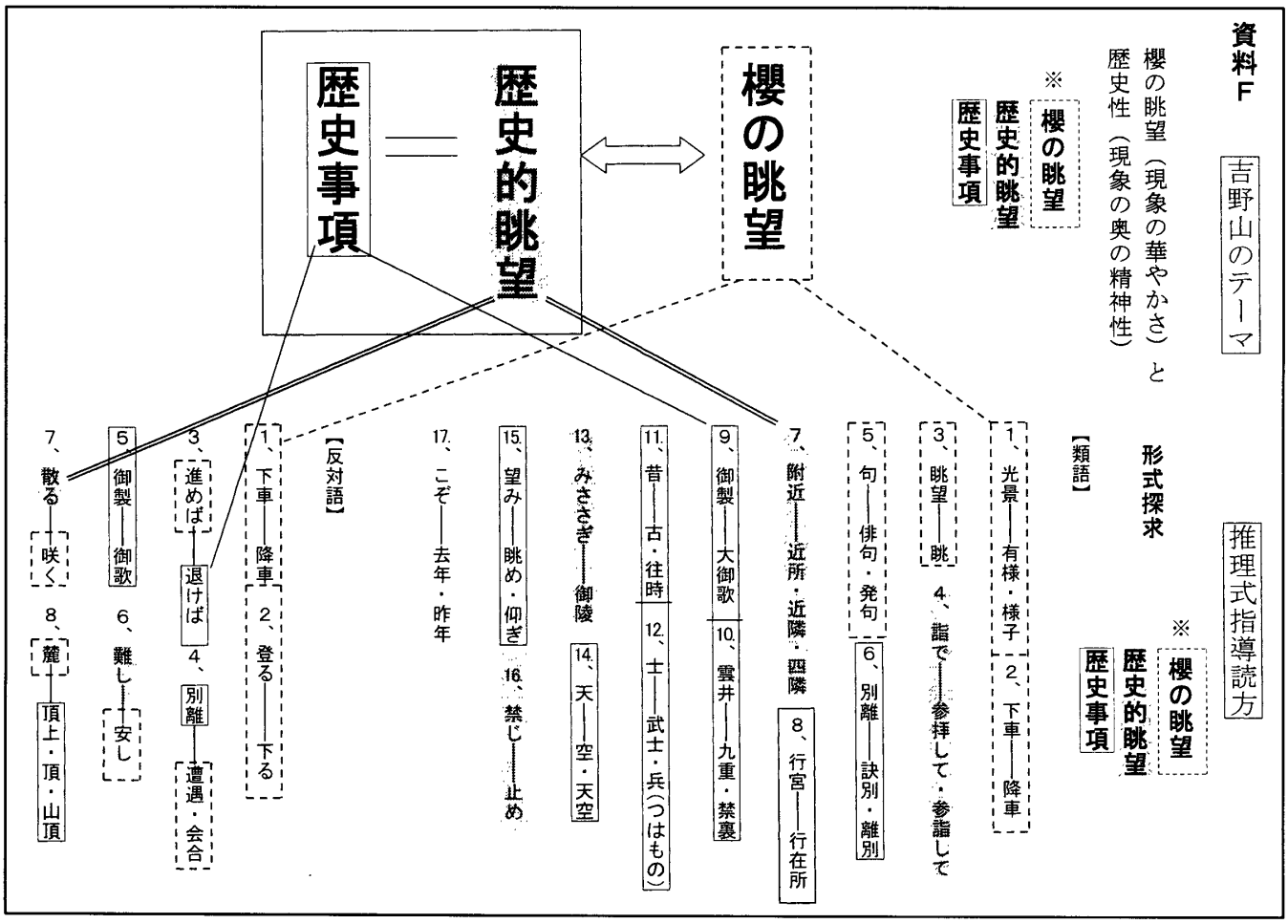
以上の方程式で語法検索をしている。

7．本文テーマと形式探求（類語・反対語）の対応（資料Ｆを参照）

形式探求は、「吉野山」のテーマと以下のような対応をみせる。「吉野山」の本文において、対立テーマ「歴史事項」と「桜の眺望」は、メインテーマとなり、二者をつなぐ「歴史的眺望」が副次的テーマとなる。メインテーマ「歴史事項」と「桜の眺望」の中で、主眼は「歴史事項」である。一見「桜の眺望」がそれであるかのように錯覚するが、「吉野山」の本質世界には「歴史事項」があり、この作品の中心軸をなしているといってよい。〔文段研究〕は、段の中心テーマと全体の流れが重視され以上の三テーマがあまり格差なく記されているが、〔形式探求〕は、隠れた主軸となるため、中心性が重視されこの三テーマの差位化は、はっきりする。

以上のテーマを差位化すると以下の通りとなる。

① 歴史事項
② 桜の眺望
③ 歴史的眺望



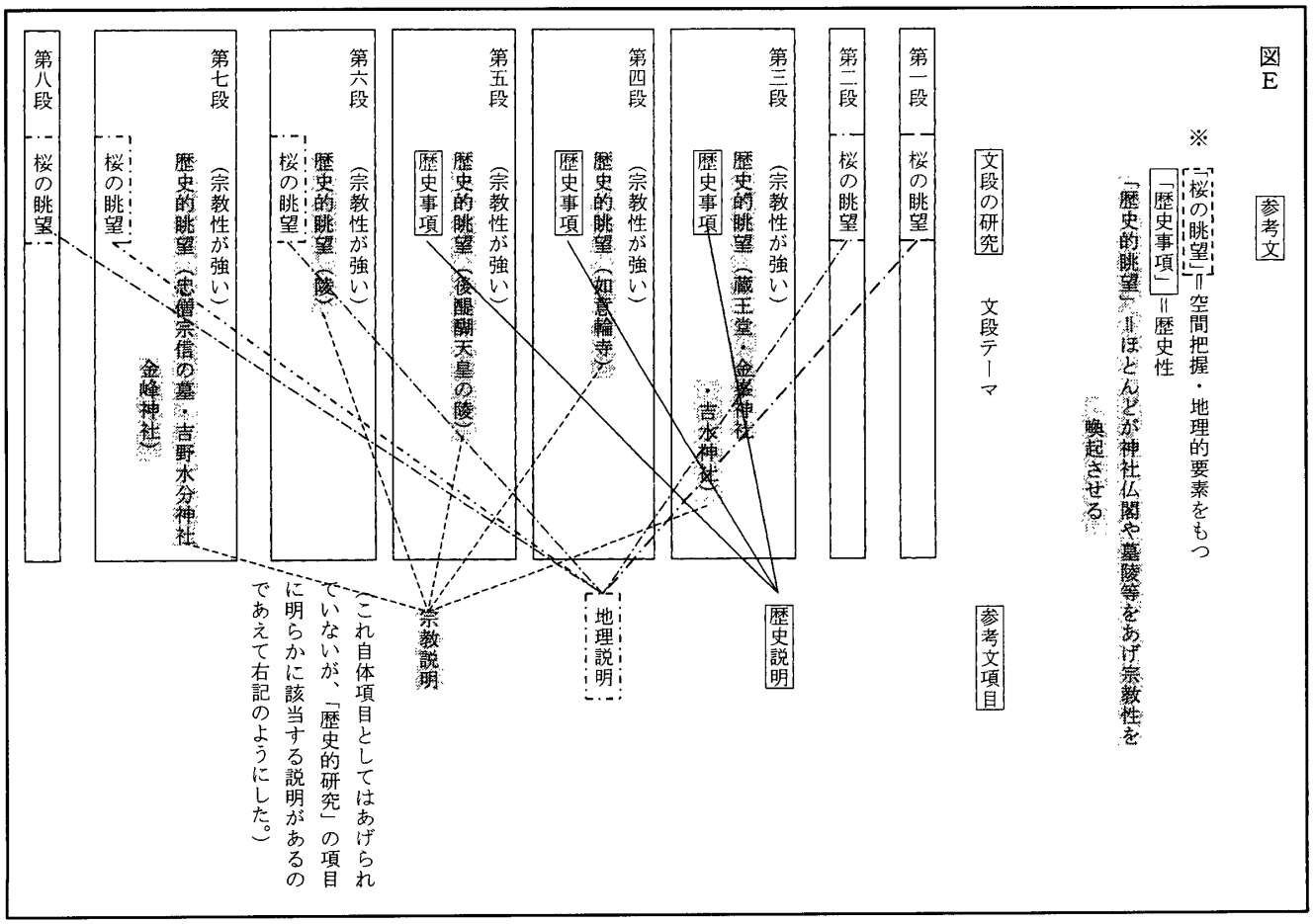
形式探求では、この①～③の順列に応じて採択語を決定している。各テーマの文から採られた類語と反語の総数を以下に記す。(P.37資料Ｆ参照)

① 歴史事項記載文中＝10語（類語８、反語２）
② 桜の眺望記載文中＝８語（類語４、反語４）
③ 歴史的眺望記載文中＝６語(類語４、反語２)

偶然とはいえ、①、②、③とテーマレベルが下がるにつれ、２語ずつ減っている。尚、形式探求の語数は、①～③のテーマの記載量によって採択語数が決まるかのように思われる。しかし、本文全体で、①歴史事項記載文は197語、②桜の眺望記載文は273語、③歴史的眺望記載文は214語であり、記載比でいえば②、③、①、の順になる。②の記載文中にも多数の類語・反語があるのに、②以上に①の記載文から類語・反語を採っている。又、②、③の順は変わらないのに①のみが逆転している。いずれにしても、「吉野山」の課においては、類反語の採択語数がテーマの差位順になっていることだけは事実である。

8．本文、文段研究と参考文との対応

『推理式指導読方』の「参考文」の項目は以下のとおりである。(図Ｅ参考文項目参照)



〈 参考文 〉

一、吉野について

（一） 地理的研究

（二） 歴史的研究

①吉野町 ②吉野神宮

③蔵王堂と金輪王寺跡・行宮 ④如意輪寺

⑤吉野水分神社 ⑥金峯神社

二、吉野を彩る歴史上の人物

（一） 後醍醐天皇 （二） 大塔宮護良親王

（三） 村上義光 （四） 楠木正行

（五） 忠僧宗信

以上の項目を見ると、歴史的研究はむしろ宗教的研究と名付けたほうが適当である。内容も、ほとんど宗教解釈と言ってよい。では、歴史説明はどこにあるのかというと、〈二、吉野を彩る歴史上の人物〉の項目に、人物の背景として満載されている。

このような誤記とも思われることがなぜ起きるのか。それは、「吉野山」という本文の特質にある。「吉野山」は、歴史、宗教、人物を一体化して描写している。「人物の背景としての歴史」と「歴史性を想起させるための宗教」を描き込んでいる。だから歴史的研究の前面に宗教解釈が入り、人物説明に歴史性が入るのは当然で、むしろ本文の趣旨に適合した解説であると言ってよい。さらに、「吉野山」が直接焦点を当てているのは〈歴史と人物〉であるから、この二者が独立項目となる。

本書は、本文を無視して独立項目を決定するのではなく、本文に合わせてそれを決め、しかし極力、必要参考内容を欠かさない。これは、本参考書の特徴の一つである。ただ、「参考文」は実質的に〈地理的説明〉、〈歴史的説明〉、〈宗教的説明〉に三大別されるので、簡明さを計って、〈P.38図E参考文項目〉の表記を採った。

次に、図Eを見る。これを見れば以下のことがすぐ解かるだろう。〈参考文〉も〈文段研究〉同様、各文段のテーマを適宜捉えていることが。そして、そのテーマについては各項目でかなり詳細な説明をおこなっている。

〈 結論 〉

〔文段研究〕	は、本文の構造と論旨の重要テーマ（中心テーマ、構成・構造上のテーマ）を遺漏なく抽出し、他を省いて構成されている。（内容・構成・構造の中軸が全て記されている）
〔語法〕	は、無秩序に語を抽出せず、各段の中心テーマ、または重要テーマから重要語を選択し、他を省いている。
〔形式探求〕	は、全体論旨〈桜の眺望〉、〈歴史的眺望〉、〈歴史事項〉の三テーマに適応する語を選出している。しかも以上三テーマを差位化し、テーマ値の高い順に語数を決定している。
〔参考文〕	は、全体論旨の三テーマ全てを網羅している。

各項目の相関性と特色

中心、構成、構造上のテーマ併載＝〔文段研究〕
中心テーマの差位化＝〔形式探究〕
中心テーマ＝〔語法・参考文〕

以上の項目の採択語、採択項目が本書全科で以下の数量に及ぶ。

単語の解釈		1921語
語法		498語
形式探求	類語	823語
	反対語	331語
参考文		202項目

本書は小学六年生対象の参考書である。とすると、このデータはまさに“驚異”である。古今の数ある参考書と比べても、これだけの解説量と充実度を誇るものはまず無いだろう。

確かに、本書は以上のことから、一見、多量・煩雑に見られる構造をしているかのように思われる。しかし、全ての項目を貫いている〈解説の方法〉は実に単純である。
それは、文章理解と作文法において何が

① 必要か
② 必要でないか

の二進法である。

いたって単純な手法である。けれど、誰一人としてそれを完全に成し遂げた者はいない。従来の国語参考書が果たしてきた役割の不完全さを顧みてもらえばすぐにわかることである。

いずれにしても、本書は、本文のテーマと各々の項目特性に合わせて、内容をこの二進法で取捨選択し、厳正かつ緻密に解説している。二者の手法で〈本文〉・〈文段研究〉・〈語法〉・〈形式探求〉・〈参考文〉がアラベスクのように編み込まれ、全体の文章観が確立する。

参考文献

『推理式・指導読方　巻十一』　戸田城外/著　日本小學館　1938年
『実力成長小学国語読本の教授　巻11』　坂本豊/著　明治図書　1936年
『小学国語読本の綜合研究　巻11』　国語教育学会/編　岩波書店　1938年
『小学国語６年上創造・学習指導書』光村図書出版会社/著作・発行　2002年
『新しい国語・六上　教師用指導書　指導編』　新しい国語編集委員会・東京書籍株式会社編集部/編　東京書籍　2002年
『教科書ガイド・小学国語６年上創造』　光村図書出版株式会社/編集・発行　2002年
『教科書ガイド・新しい国語六上』　アストロ教育システムあすとろ出版部　2002年
『小学国語読本指導書尋常科用　巻11』　佐藤徳市・山内才治/著　賢文館　1936年
『小学国語読本と教壇　巻11』　芦田恵之助/著　同志同行社　1938年
『生活国語・小学国語読本の指導　巻11』佐藤末吉/著　明治図書　1936年
『岩波講座国語教育　巻３』　西尾実・他/著　岩波書店　1936年
『尋常小学国語読本補習参考書　６学年用』　真野豊吉/編　文美堂　1912年
『尋常小学国語読本取扱の真髄　巻11』　野沢正浩/著　目黒書店　1922年
『西郷竹彦教科書ハンドブック　小学６年の国語』　西郷竹彦/著　1996年
『授業のための教科書研究新国語６』　児童言語研究会/編　一光社　1981年
『国語・読みの授業　小学６年』　児童言語研究会/編　一光社　1991年

(2002年９月30日　受理)

An Analysis of "SUIRISHIKI—SHIDOYOMIKATA" by Jogai Toda

Kiyoshi Kawashima

Abstract

This study analyses the theme of "Yoshinoyama," Lesson One of *Jinjosyogaku Tokuhon* vol.11, a textbook on Japanese language published in 1933.

This paper studies feature of the items in "Suirishiki Shidōyomikata," explaining the textbook. The items are 〈Mondan Kenkyū〉, 〈Gohō〉, 〈Keishiki Tankyū〉 and 〈Sankōbun〉.

This paper showes the relationship between the text and the items, the relationship among the items, and the inter relationship of all them.

Those three topics, developed the technique of explanation of the items, that is, "binary notation" based on 〈1.what is essential for the understanding of the text〉 and 〈2.what is not〉.

Consequently, it can be said that the "binary notation" cleared up the process of selecting the necessary contents, explaining the text one after another from many viewpoints. And also, it showed the process of fixing the view of the text, relating 〈the text〉 to 〈the items〉 like an arabesque.